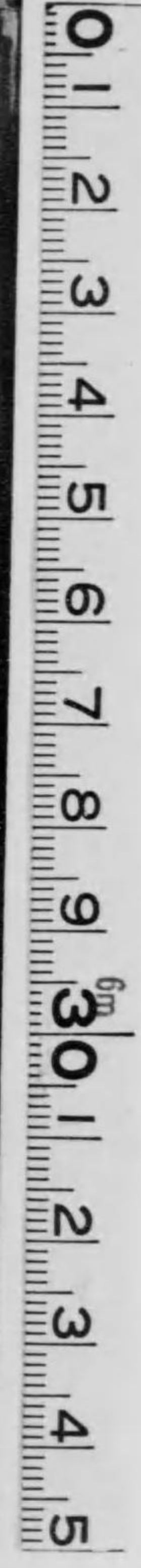
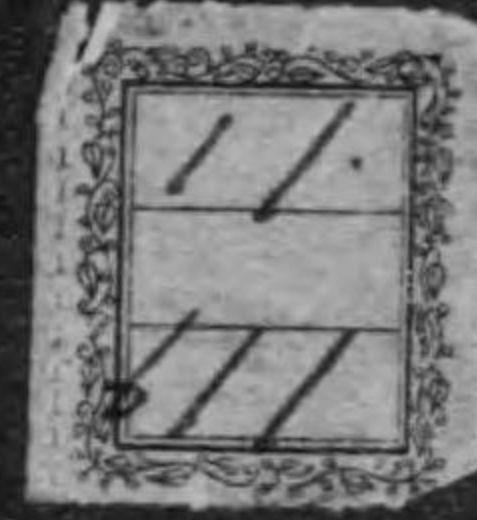


青木志武子遺詠



始



青木志山子遺部



11-611

序

余が初めて青木夫人と知合になつたのは、明治卅八九年の頃、京都に於て阿知和安彦氏等と精華女學校を設立した時で、その頃は夫人はいまだ關谷しむ子嬢で、京都府立第一高等女學校を卒業せられて程もなき時代であつた。卒業生中の才媛であつたから、即ちこの精華女學校の教師に囑托したのであつた。これよりしむ子嬢は時々余の寓を音づれて、歌文などの相談があつた。段々と懇意になるにつれて、その淑徳の高いこと、學才の凡ならぬこと

大正
11. 11. 15
内交

も知られて有望の婦人として交はつて居つた。ある年のごときは、新年の休暇に、阿知和氏と共に下の關なる關谷家にゆき、嬢の御兩親に對面し一二夜を御邪魔したところとさへあつた。かゝる程に今は亡き友加藤駒二氏からの依頼で、青木家に縁づかれる手傳をするに至つたのである。

嬢は青木夫人となられてからは東京にうつられた。やがて余も京都を引上げて東京に歸住することゝなつたから、又常に往來することゝなつたが、これよりはもとの關谷嬢でなく、青木夫人で家政の監督もあつて歌文など

昔のやうに勉強は出来なかつたが、猶をり／＼に草稿などを持參せられ、後には愛嬢の手を引きながら歌稿を携へ來られたことなどもあつた。

夫人は夏冬の間は、大方その夫君に従ひ、愛嬢たちを連れて箱根や鎌倉や又伊豆地方などに旅行せられたが、その先々より必ず文通があつた。忙しい中にも昔を忘れぬなつかしい情は實に掬すべきで、心窃に喜んで居つた。

一昨年の初冬の頃でもあつたらうか、余が家に例の愛嬢と共に來られて、自分は澤山の小供があるからその名について一々歌をよんでくれと頼まれたが余は未だその

望をも果さない中に、夫人は意外にも流感に襲はれて、冥途の客となられたのである。殊にその當時は夫人の最愛の令嬢たちも共に枕を並べて居られたといふに至つては、實に悲惨の極で、何とも言ひやうもないのである。人生の無常、今更に驚くわけではないが、かくまでも悲惨ならしめずともよかるべきものをと、天を恨み地を恨んだのは、恐く余一人のみではなかつたであらう。

歲月は矢の如く、この年この月は、はや夫人の一週忌である。徹二博士、一日余を音つれられて、夫人の在學中よりの詠草を示され、これをだに亡人の形見とせむといはる

ゝに余も涙を吞んで之をよみ、博士と更に議を重ねてかく一冊となすことゝなつた。思ふに夫人はいはゆる良妻であり賢母であつて、能く青木家を治め、その子女を教育せられ、又よくよき人たちと交りを厚うせられた賢夫人であつた。夫人の本領はそこに在つて決してこの歌稿に在るわけではない。併しながら赤い芽はおのづから赤く、薰りある木はおのづから薰るやうに、夫人の天性の淑徳とその學才とは、是等の歌の中にかすくあらはれて、夫人を偲ぶ最もよき資料である。世の夫人を知つた方々は言ふまでもないが、未だ知られない人々も、この

集をよみ味はふ時には、夫人の人と爲りを伺ふことが出来るであらう。されば再び形を見ること能はざる夫人を偲び、再び聞くことの出来ぬ夫人の聲を聞くに、これにまされるものはなからう。

回顧すれば、夫人が關谷嬢で、精華女學校に教鞭を執られて居つた姿は目に残つて居る。青木夫人となつて正装して余が家を訪はれた時のありさまは幻のやうに見ゆるに、今は聲もなく形もない、遺詠に對してたゞその昔を偲ぶのみとなつた。あゝ實に短い悲しい交りであつた。

大正十年三月上旬

池邊義象

青木しむ子遺詠

慈善事業

うりかひの事のみなせる世の中に

むくいもとめぬわさはこのわさ

おのか身のよき名たてむとする人は

あきひととしもいふへかりけり

人の撰歌をよみて

うるはしき歌にもあるかな我もしか

うかひしこともなきはあらねと

月の歌の中に

萩か枝のかけそうつれる久方の

空のいつこに月のてるらむ

かゝみ

ますかゝみこゝろもうつる心地して

むかふおもわのはつかしきかな

折にふれて

玉ほこのすくなる道をともしれば

なとふみまよふ心なるらむ

秋興

心地よくはれたるけふは秋山に

たけかる人もこゝろゆるらむ

秋曉

なくむしの聲もかれにしあさちふの

露にやつるゝあり明の月

亡人の家を訪ひて

たつね来てあひ見むものとおもひしに

今はむかしの人となりぬる

うつし世の人ならなくにわすれては

かけやみゆるとさしのそきつゝ

不倒翁

見よや人七たひ八度たふれても

またおきかへりたてる翁を

大田きくえ君の父君をいたみて

さき出てむ若木の花の春またて

死出の旅路になといそきけむ

吊らひに行きて

なためむとおもひてこしをなか／＼に

我こそ音には先つなかれけれ

それにつけておもひつゝけたるまゝを

はらからにおくれてたにもかなしきを

いかにかあるらむ君か心は

ありし世にかきなかしけむ水莖や

しのふ涙のいつみなるらむ

葬の前夜

夜もすがら棺のまへにさもらひて

夢なれかしと君なけくらむ

うつし世のあらぬまとゐもかきりそと

ひつきまもりてなきあかすらむ

その夜月いとあかゝりければ

いと、しく袖ぬらすらむ心あらは

こよひの月よとくかくれなむ

よなくは夢にあひみて夢そとも

うつゝの後にさためかぬらむ

人の子の千代もといのるかひもなし

心つよきは死出の使ひか

あかつきの鐘をきゝて

ぬは玉の夢のうちなるなき人の

かけやけつらむあかつきのかね

いつかたにゆきましけむと大そらを

仰きてなけきふしてなくかな

わきいつる涙おさへて幼きを

なたむる心いかにかあるらむ

折にふれて

人はいさ何ともおもへ我か心

てらせる神を我はたのまむ

亡人のはかにまうてゝ

たゝ一重おほへる土のしたにして

君かみこゑをなとへたつらむ

高張のもしひのみはゆらゝけと

なれきつとたにいふこゑもなし

水入の猫の形したるを

まねきねこ誰か手づくりかしらねとも

その手そのかほをかしくもあるか

その水入とかくすれと水のいて

こねはいみしうつよくうちふる

に一しつく落ちぬ

手にとりて身をさかさまにうちふれば

かなしかるらむなみたおとしぬ

旅順口をいま落したりとてよろこび

いさみつるに目さむればあかつきの

夢にて起床時の柏子木のみいと囂し

おきよとてうつ木の音を西の海の

わかかちときのことときかはや

提灯行列をみて

身に持てる赤きこゝろをともし火に

みせつゝ人のうちつとふなり

なかしてしみいくさ人の血しほとも

みれはみらるゝあけのともし火

安倍仲麿

もろこしゆ月を見さけて心には

三笠のやまやのほりましけむ

菅公

なか／＼にすきこしかたそしのはるゝ

心つくしの秋のよの月

月を見て

大そらにくまなくすめる月かけの

清きをひとのこゝろともかを

虫

月落ちて小くらきよはもなくむしの

こゑはさやけき蓬生の宿

折にふれて

葉かくれの小萩に月のかけさして

あなたにうたふにはとりの聲

在原業平朝臣

うはへこそうき名はなかせ小野山の

雪の下水くむ人そくむ

母

みめくみのふかきにつけていとしく

母なき人そかなしかりける

師

したはしきたらちねとしも思ふかな

みなさけ深きみをしへのおや

折にふれて

さちおほきわか身なりけりかとにたちて

ものこふ賤もこゝらある世に

平安女學院の教會堂のほとりをすきて

ひな人は何と見るらむ十の字の

やそのちまたにたてるしるしを

月前虫

てる月の下にきこゆる虫の音は

かなしとやなくたのしとやうたふ

筑紫にて名島の磯なる帆はしら石をみて

いにしへはいさしら波のうちよする

いそにのこれるほはしらのいし

汽車にてたゝら川の鐵橋をすくるとき

この川そひのすゑにすめる友の上をお

もひいてゝ

行く水にことつてせはやたゝら川

たゝには君にあふよしをなみ

千代の松原をすくるに折ふし夕日

かけいとうるはしかりければ

木の間もる夕日のかけをうるはしみ

あはとのみ見る千代の松原

病院に行く道すからいたうやめる

母にそひて行くをとめあり

いたつきの母の身よりもなかくに

をとめの心くるしかるらむ

九月十日の曉とみにいとこの

うつせぬときいて

うせぬとは夢かうつゝか夢なれと

おもふもかなしけふのうつゝは

父におくれたる幼子を思ひやりて

今は世になしともしらてちゝくと

ひつきのあたりなきまとふらむ

この幼子さきは母にはなれこたひ

また父をうしないたれば

父母のちきりもうすきをさな子の

すくせのほとそかなしかりける

その兒を養ふ伯母の心をおもひやりて

泣くにつけゑむにつけつゝをさな子の

顔うちまもりなけきますらむ

櫻井翁六十一の賀に寄水祝

櫻井のちりも濁らぬ水の面に

君か千とせのかけそ見えける

あつさ弓のとけき春を心にて

千代もたえせぬ櫻井の水

連戦連勝

天地の神もうれしときかすらむ

うみちくかちのかちときこゑ

烏港艦隊

海はらの霧のまよひにまたも來つ

命しらすのうらしほのふね

負傷兵の眠れるさまをみて

床の上に身は横ほりてねふれとも

たとる夢路やもろこしの野邊

激戦のさまをきゝて

きくたにもみのけよたちぬ血はなかれ

かはねかさなるたゝかひのには

朝きよめするほと軒にくもの糸を

かくるをみて

はゝきもてやかてはらはむのきそとも

しらてや蜘蛛の糸をかくらむ

夏のなかは頃紫野自在庵の庭に

萩の咲きたるを見て

のかれすむ人のいほりは夏なから

うき世を秋の萩もさくらむ

兄の百日の忌に

いかさまにいかなる國をたとりつゝ

けふのもゝかの手むけうくらむ

たゝすの森にて

心をもたゝすの森の下かけの

御手洗川にいさすゝかはや

双物もて草をとるほとにあやまりて

みゝすを二つにきりたりければ

夏くさを刈るととかまのとかもなき

むしのいのちをなとたちにつむ

朝とく御苑内を散歩して

いと、しくたふとかりけり大宮の

木の間をもる、朝日子のかけ

久しくあはさりし友のいたくやみ

おとろへたるさまをみて

いかにせはいつかいゆらむいたつきに

見まかふはかりなれる君はも

朝霞

さしいつる日かけをうけて遠山の

かすむこすゑののとかなるかな

けさ見れはをちの山々うちかすみ

いつこともなく春めきにけり

夕霞

入相のかねはひゝきて春霞

たなひく中にくる、山里

なかむれはのとかなるかな夕月の

かけもおほろにかすみわたりて

初聞鶯

わかやとの梅さきいて、いつしかと

まちし驚いまそきぬる

めつらしく初うくひすのこゑすなり

まちし心をかれやしりつる

隣

垣こしにのこるともしの見ゆるなり

あくるもしらて文やよむらむ

るすゐしてさひしきよるについちこし

うたひのこゑのもれてきこゆる

鹿

月ははや入りはてたれと山のはに

ひとりさやけきをしかのこゑ

さをしかのなくこゑいまはたえにけり

なかこひわたる妻にあひにけむ

紅葉

くれなるの雲やかゝると見るまでに

染めわたしけりみねのもみちは

いろつけるやとのこすゑに高尾山

こそ見しにしきしのはるゝかな

菊

露しもしをれぬ庭のしらきくの

花こそ人のかゝみなりけれ

かしこしや大御しるしのきくの花

賤かかきねにさきいてにけり

柳蔭涼

たちよれは吹く風すゝし柳かけ

しはしいこはむ道いそくとも

なか／＼にすゝしかりけり雨すきて

露ちる木々になくせみの聲

梅

まねかねと梅さかりなるわか宿に

おもはぬ人の聲を聞くかな

夜 梅

いとゝしくゆかしけりくれはてゝ

色はみえねとにほふ梅か香

朝戸出の袖かをるなり梅の花

きのふは見えぬ枝にさきけり

待 鶯

谷の戸をなほしら雪のとさせはや

まてと來なかぬうくひすのこゑ

うくひすのこゑそまたるゝわかやとの

軒端の梅のさきいてしより

主上を拜み奉りて

大きみのみ影あふきてかしこさに

こほるゝなみたとゝめかねつゝ

なき人の夢をみて

御ほとけの御國のかたやぬは玉の

夢路なるらむよへのこのかみ

朝な夕な手向くる水の上にたに

ありし御かけのうつらましかは

あめのふる日

露にたにこゝろをおきてをしみつる

小萩かうへにそゝくあめかな

父母のうへにまかことのありし

夢をみて

たらちねにふみやりてみむぬは玉の

夢にうきことあまた見つれば

快 樂

たのしみはあまたあれともあらましの

ひと日のわさをなしをへし時

訓盲院

大御代の光にあひてめしひさへ

學ひの道にまよはさりけり

遠國なる友に

月見れは月につけつゝ花見れは

花につけつゝ君をしそおもふ

すてに學校をいてたる友より世の中の

つらきことかすくゝいひおこせたるに

つけておのれはいつまでも師のもとに

のみ居まほしうおほえて

よの中のあらしをしらぬは、そ葉の

蔭にのみこそすまゝほしけれ

さかのほとりよりあたこ山をのそみて

いたゝきは人の面のことしなといふほ

とに雲かゝりぬ

心なきものとも見えすあたこ山

もしれはかくすみねのしら雲

おほかたは夢とすきゆく世の中を

うつゝと誰かいひはしめけむ

うきこともうれしき事もこしかたは

たゞ夢をみし心地こそすれ

寄宿舎にありて幼き人のやめるを

みとりして

たらちねの母や戀しとおもふらむ

わかみとりするさまを見るにも

雨いたくふりて庭の萩の花

むなしうなりたれば

折られてしをかめの萩そなか／＼に

雨をもしらて咲きのこりけり

日 蝕

まとかなる影のかけぬと見るうちに

弓張月となりにけるかな

月

むらきものこゝろよりこそうれしとも

かなしとも見れ秋のよの月

柏子木をきいて

いとはやもねよとうつ木の音すなり

をしくも月は空にすめるを

夕はえ

山の端に入りはてたれと天つ日の

なこりのとけゆ夕はえの空

新年山

朝日さす富士の嶺より動きなき

御代の年こそたちはしめけれ

あたし國の人も仰かむするかなる

ふしのたかねにのほる初日は

けさ見れはうけらのけむりほの見えて

のとかに霞むひむかしの山

摘菜

つみ入れてこにあまれとも春の野に

あかぬは千代のわかをなりけり

こむ春は野守に道をとひおきて

こゝらの若菜つみえてしかな

梅花處々

いつこよりたつねてゆかむ梅の花

さかりのこすゑかしこにもみゆ

柳風

このあした春のこちかせ吹きぬらし

柳の糸のうちなひくなり

濱

波のよる濱松かねにやすらひて

ひろひしかひのかすをよむかな

牡丹

梅もすき櫻もちりてこのころは

いろふかみくささかりなりけり

山吹

いはねとも春もたけぬとおもふより

あはれとそみるやまふきの花

山吹の花さかりなる頃都の友に送る

舟うけてともにめてにしうち川の

きしの山吹いまかさくらむ

饑饉にあへる人のうへをおもひて

一日たにもものたうへすはくるしきを

いかにかあらむみちのくの人

はらからのうゑしぬときけはうみ山の

あちにいかてかあきてあるへき

足れる身もこゝろくるしやみちのくの

我はらからのうゑるおもへは

うゑてしぬ人の上きけはくちにはらに

あける我身そこゝろくるしき

折にふれて

うきふしもありけるものをいかなれば

こしかたのかくこひしかるらむ

こしかたをなほしのへとや文の屋に

みしよのまゝの山の端の月

くも

からうしてはらひはてしをさゝかにの

糸はまたしものきにかゝれる

いひしらぬ春のなかめかいたつきの

わかこのかみにみせたくそおもふ

たをりきてをかめにさせる花のうへに

春やしるらむやみませる君

ものよりかへるさ幼き子らのあそへる

を見ればそのなかにとつ國のちこもま

しれり

こと國のちこも御國のをさなこも

ともにあそへる世となりけり

阿新丸

親をおもふこゝろのたけの一ふしに

さとのありその波もわけけむ

青葉笛

すまの浦のこる青葉にありしよの

花のおもかけおもひこそやれ

壇の浦をすくる時

ありしよをほのかにみせて糸すゝき

招くもあはれ浦の夕かせ

清少納言

まきあけしをすのひまにもたゝらぬ

君かこゝろのおくは見えたり

時代祭を見て

うつりこし代々の手ふりをまのあたり

さやかにみする神まつりかな

天つ日にかゝやきあひてものゝ夫の

よろひのそてのうるはしきかな

行列のなかの人巻煙草をくはへつゝ

行くを見て

ゆかりある大宮人によそひつゝ

たはこくひもち行くはなに人

車夫につききゝたる事ありて

のる人もひく身となるや小くるまの

めくる浮世のならひなるらむ

あすは多武の峯にもせむと

おもひさためつる夜

たまくらの夢のうちにもかたらひの

山のもみちはさやに見えつゝ

幾度も手にとりみれと枕邊の

とけいのはりそめくりかてなる

あかつきの頃市中を過く

おきいてし家もまれなる市まちを

月見をからに並ひゆくかな

一同汽車にのりたるに一人の友

また來らす

友一人また來らぬをかくなから

汽車のいてなはいかにかはせむ

汽車の窓より見るに霧ふかくたちこめ

たれは

まれに見るけふの旅路の朝けしき

なと秋きりのたちかくすらむ

あるところにて

心なくはしりも行くか杉の間に

そめしもみちのあはと見えしを

箸の御墓をすきて

神わさのはしのみ墓をのる汽車の

まとより見つゝゆくかかしこさ

三山をみわたして

見渡せばむつましけなる三の山

ありしうらみはわすれはてけむ

三輪の驛にて

みやしろやかなたなるらむ三わの山

しるしまかはぬ杉のむら立

大和廻りしをへて

かへりなは人にほこらむいにしへに

よしあるところあまた見つれば

畝傍山を望みて

たまたすきかけてそしのふ畝傍山

のほりしこそその夏をおほえて

多武峯のほりて

多武の峯のほりて見れはくるしさも

わするはかりにもみちしてけり

やことなき君のみたまのいませはや

にしききぬらんかたらひの山

立田姫おりかく山のからにしき

一日かさをむみぬ人のため

山を下るとき櫻の木にあまたあるを見て

もみち見てけふこそかへれ山櫻

又来む春をなれにちきらむ

かへるさの汽車はや七條につかむとす

ふるさとかへりし時にひきかへて

あまりに汽車のはやしとそおもふ

たのしさはまたつきせぬをこの汽車の

しはし都につかすもあらなむ

倉梯村にて

ことなくは一夜やとりていにしへの

倉梯山の月も見てしか

ある夜

あつふすまかさねてもなほさむきよに

めしひのふえのこゑきこゆなり

行路電燈

てりわたる月かと思れはいなつまの

かけをと、めしひかりなりけり

無線電信

一寸ちの道たになくてくすしくも

何のよすかにことかよふらむ

毛利邸にまるのほりける時水なしの池

のほとりにて

きて見れば底の小石もあらはにて

名こそしるけれ水なしの池

筑紫なる観世音寺にまうてける時

鐘の音をきゝて

大神のこゝつくしのいにしへを

入相のかねにしのふけふかな

筑紫にて不動尊にまうてむとてた

つねたれと見えすいところしたる

折からゆくりなく見いて奉りて

たつねかねかへるあしへのつちむろの

おくにかゝやくともし火の影

火事

をみな子のなきさけふらむこゑもして

のほるほのほのものすこきかな

早梅

おくれてははえなきものとはふらむ

春のこなたの梅のはつ花

冬かれのさひしき庭にうめの花

さけるを見れば春ちかみかも

初午

神まつる春の初午けふなれや

つゝみのひゝきたえすきこゆる

さと人のいなりまうでのしけゝれは

野守か家も小あきをひする

雑あそび

まつらるゝひなのみまへに少女子か

神酒さゝくるかあいらしきかな

花

いにしへもいまもかはらぬことをれと

まことに花はさくらなりけり

山さくらそらのものにもあらなくに

雲とたなひき雪とちり来る

蓮

いけみつのにこりにしまぬはちす葉の

きよきを人のこゝともかな

みそのふのいけにおふなる花はちす

すがくしくもみえわたるかな

観月

みぬさかひしらぬ昔のあはれさも

さやかにうつる月のかけかな

くもなき御代のかけともあふかれて

いよくてれる秋のよの月

菊

大君の大みしるしのきくの花

色もかをりもたふかりけり

ふりつみし雪かとまかふ白きくの

ひかりもきよしありあけのには

雪

高とのゝをすのひまよりなかわれは

外山の雪ははやもつもれり

わすれては山なき國とおもふまで

世をうつみてもつもるしら雪

名所海

まほかたほゆきかふふねのあかしかた

松の葉こしに見えかくれする
つくしかた時まちつけてしらぬひの
もゆるはなにのおもひなるらむ

寄衣祝

おりあやのころもゝいかてみほまれの
君かにしきにおよふへしやは
尋常小學にありし時の師の君より
御寫眞をおくられたるにつきて
一もしもしらぬ我手をとりました
をしへし君かめくみをそおもふ

みこゝろはうつらぬものをとすれば
こととはまほしき君かうつしゑ
折にふれて

ひとすちに我かまゝろをつくしなば
世にあしき人あらしとそおもふ
友の兄におくれぬときゝてよみて
つかはしける

我もまたありしわかれのしのはれて
君かこゝをおもひこそやれ
出征軍人を送りて

いさましくみいくさおくることの葉の

葉末に露のなとこほるらむ

月を見て

もろこしの野にあかすらむものゝ夫の

かけこそうかへ弓張の月

八月十五日筋ヶ濱にものでしてひゝきなた

を見渡しけるときいにし六月のけふあた

艦にうちしつめられし常陸丸の殉難者を

おもひて

ひたちまるその夜しのへはひゝき灘

そよふく風もたゝならぬかな

なみの音もうらみのこゑときこえけり

おもへはかなしみなつきのけふ

リユーリック號のうしつめられける

とき常陸丸とともにうせられける人々

の靈に

天かけりうれしともみようらしほの

うらみのふねをうちしつめてき

わか第二艦隊の蔚山沖にて露艦

リユーリック號をしつめける時

下の關にありて

なるかみのおとゝきゝしはひゝきなた

あたらうつつゝのひゝきなりけり

硯の海

いそのかみ古城山の月かけも

硯の海の波にうつれる

壇の浦懐古

波風さわくあら海に

あたら白玉かきいたき

今はとあまのしつみけむ

むかしかなしき壇の浦

巖上松

大御代のためしにひかむ松なれば

うこかぬ岩に根をやしめけむ

朝 鶯

うくひすのきなく朝けのこゑきけは

はゝきとる手もおこたられけり

朝 顔

はかなきもおのか命と定めけむ

心やすけに咲けるあさかほ

片爪のかにをみて

世の中はかくそことわりかにの爪の

かたつめなれは大きくありけり

述 懐

うき時もうれしきをりもいほひきの

動かぬいしをこゝろともかな

亡兄の夢を見て

覺めはてしうつゝをゆめにゆめの中に

あひみし夢をうつゝともかな

亡兄の墓にいちごをそなへて

ありし世に君かこのみしいちこの實

今日はそなふれとめすこともなし

亡兄のことを

ともすれはあらぬ聲にもなき人の

我をめすかと思ふかなしさ

たらちね恵みの海はふかけれと

浅き心のみつからそうき

かけまくもかしこききさいの宮より

ものたまはせけるかたしけなさに
うれしさもおきところこそなかりけれ

此のみめくみのおほみたまもの
宮城を拜しける時わか師猪熊先生の
ふたゝひ國書進講の榮をかうふり給
ひしことをおもひ出てゝ・

大内山茂れる松の奥ふかく

をしへのおやはのほりましけむ

ためしなき君か譽やうたふらむ

大内山のまづかせのこゑ

百年の君かみかけやうつるらむ

かもの流のきよきかゝみに

つとめつゝまた心せよ水とりの

か茂の川かせはたやさすらむ

船出する君こゝせよわたのはら

うき世の波はあらくこそあれ

月に日に淺くなりゆく山の井の

みつこそ人の心をりけれ

年頃すみなれし文の屋をしそくとて
をりくはとはなむものをこの夕

何にこほるゝなみたなるらむ

こゝろあひの友に

もろとも法のめくみを仰きつゝ

學ひ庭にいらんとそおもふ

故郷の友に

海山を遠くはなれて年ふれと

君かまことを忘れやはする

亡師の玉章を見て

なき人のかたみの文を見ることに

むかしをしのお袖のつゆけさ

手にとるもなけきの種と知りながら

なほくりかへすみつくきのあと

なきこともわすれし文のあと見れば

たもとにかゝる露そかなしき

なき友の夢を見て

なき友とかたりし夢のはやさめて

有明月のにくゝもあるかな

兄の病おこたらぬをなけきて

うれたしや日數ふれとも我兄の

いたつきいまたおこたらぬとは

折にふれて

うきことのつもりなからにうれしきは

都の兄のたよりなりけり

師の恩

いつの世にむくいまつらんはてもなき

わか師の君のふかきめくみは

海山のふかき高きも何かせん

わか師の君のめくみおもへは

折にふれて

おもはすもうかれいてにけり鶯の

けさめつらしくなきそめしより

梅 花

ふる雪をいとほす咲ける梅の花

身のおこたりをいさめかほにて

更 衣

少女子かけさきかへたるうすきぬの

袖にすゝしく風かをるなり

藤の花

何となくさきし色香のやさしさに

見れともあかぬ藤の花房

病中入江二方の御深切をかまけて

ふたかたのあつきめくみによりてこそ

わかいたつきも安くいえけれ

さよふけてしくれの雨の音すれは

そゝろまくらもうるほひにけり

遠國なる友の許に

もろともに手に手をとりにてひかし山

月見しよるそこひしかりける

あめにつけ風につけつゝふるさとの

たらちねのうへまつおもふかを

亡友人羅の君の事を

いかはかりくるしかりけんたらちねを

置きて先たつ君か心は

嵐山に遊へる時

大井川きよきなかれに舟うけて

ありし昔をしのふけふかを

折にふれて

今ははやまよひの夢もさめはてゝ

高嶺の月を見るかうれしさ

秋 夜

月ははや雲かくれして見えねとも

虫のこゑのみいとさやかなる

汽 車

時の間に千里をはしる蒸気車は

これワット氏のたまものにかそ

故郷の友に

いまはまた海山遠くへたてきぬ

こひしかりけりこひしかるらむ

いまはかく海山遠くへたつとも

またの逢瀬そたのしかりける

大正六年

人より神薬を得て

くすしさへすへなき時にあたへとの

このいくくすりきゝめあらなむ

命ともたのむ今はのいくくすり

一しつきたにもらさしとおもふ

かくならむ命としらは夜も日も

乳をふくませて抱きけむものを

死ぬる子とかねてしりせはかすくの

薬の針をなとかさすへき

抱きてよともろ手をのへてほゝゑみし

その面影そ目にのこりける

汝か命のへんとてこそ抱くなの

そのことはにもしたかひしものを

入棺の前に名残ををしみつゝ

うつし世はこれかきなり母は今

汝を抱けるそ千枝子ゑみてよ

をしめとも名残はつきす時は來ぬ

なきからにさへ今別るゝか

人形もまりも添ふれとこのひつきに

ともに入られぬ母いかにせむ

柩のくきをうつおとをきゝて

わか胸をうちきさまるゝ心地して

ひつきのくきの身にそしみぬる

埋葬して

束の間に土を掩ひてひつきさへ

みえずなりけりあはれかなし子

土深くうつめもするかうすきぬを

かけてもむねの苦しといひしを
たきものゝ烟の末にしはしたに

姿は見えよこの母か爲

野へよりかへるさ

のへおくりしてかへるさのうしろ髪

ひかるゝ心しるやなか魂

車の上にて

もろともにのりてゑみしもおもひいてゝ

夢こゝちするを車の上

北風のみにしむこよひたゝひとり

のこしゝのへのかなし子をおもふ

蓮の上に身はのほるともはゝそはの

そのした蔭や戀しかるらむ

ありしよに見なはいかにとかすゝの

手向の花にちる涙かな

花鳥の春ともならは上野なる

象も見せむといひきかせしを

ほかの子にくらへてちゑも深かりし

みめもよかりしあはれなきちこ

ともすれはあらぬ聲にもなきちこの

我をよふかとおとろかれぬる

花さかむ春もやあると病葉の

千枝に心をくはりしものを

水のこと雲のことしときく世にも

なほもこのみをかけし我子は

桃の花を墓にそなへて

桃見ても目にこそうかへひなまつり

人形いたきゑみし面影

墓にて

おほおはのくけてたまひしまりもちて

とはに眠るかこの苔の下

墓よりかへるさ路の子ともを見て

忘れてはそれかとそおもふなきちこた

似たる子ともものうしろかけをは

さむるとも同じ夢の世なきちこの

夢とこしへにさめすもあらなむ

なきからとなれるわか子にきせむとて

この春衣つくらさりしを

梅もあり櫻もありと春衣の

袖うちかへしゑみし面影

文のやにかよはむ折もきらるへく

ぬひあけ深くしたるこのきぬ

うつくしと父にも見せつはしために

ほこりあるきし衣そのこれる

鎌倉に轉地させむため新しくつくりし

衣を見て

さかみの海波のしふきにぬれぬへき

小袖にけふはちる涙かな

魂よなかたみのきぬを母かきて

肌を抱かむうれしとも見よ

忘れてはまたなきちこの名をよひて

袖の涙のかわく日もなし

靴下を見て

みとりなす庭の芝生に鬼をおひて

遊ひし折のくれなるのたひ

うつせみのかたみのころもかきいたき

魂のゆくへをおもふ夜半かな

奥津城の一もと松をふく風に

亡子の聲もましれとぞ思ふ

先たてぬ人はしらの悲し子の

野邊おくりしてかへる心を

赤き帽子ものいひ手ふりなきちこに

似たるはいくつ誰か家のか子

なき師の玉章を見て

なき人のかたみのふみを見ることに

むかしを忍ふそてのつゆけさ

手にとるもなけきの種としりなから

なほくりかへすみつくきのあと

憂き事もわすれし文のあと見れば

たもとにかゝ露そかなしき

なき友の夢を見て

なき友とかたりしゆめのはやさめて

ありあけの月にくももあるかな

明治三十四年

明月の傳をよみて

濁り江にさけともさらに汚れさる

きみか心ははちすなりけり

煬帝の世の民のくるしみをおもひやりて

そのかみのたみのくるしみおもふにも

いやあふかるゝきみのみめくみ

富海にもものしけるととき父上の浦の

けしきいかにとのたまはせしに

きしよりもおもひしよりもいやまして

みるめおほかる浦にそありける

同じ時

ま帆かたほゆきかふふねもおもしろや

見渡し遠き富の海原

同じ時はるかにうすく豊の山みえけるに

いたつきの爲かしここにいます兄君のなつ

かしくて

かなたなる山はつくしときくからに

いよよこひしきいたつきの兄

同じく

あなこひしわか兄君のおはします

つくしは雲のあなたとそきく

旅の途すから母きみのかたち山を

さしてかしここそ我が祖先のいま

し、處なれとのたまふに

かたち山かたりきかせよそのむかし

遠つみ祖のいましゝさまを

ひとすちにいのらぬ朝そなかりける

わか兄君のみあしたつ日を

山の中に在りて月おもしろかりし夜

おはしまに袖うちかけて友とちと

月みる夜半のおもしろきかな

同じ時

かしましきかはつの聲をいとひてや

月はいつしか雲かくれしぬ

都にのほるとき

けふよりはまたも都にのほるなり

まさきくいませかへりこんまで

同じく

ひたすらにさきくいませといのるなり

み許まかりていてゆく我は

兄君の病息らぬをなけきて

いたましや年月ふれと兄上の

いたつきのなほおこたらぬとは

徳山にいたりしとき舊き友のふりはへて

訪ひければともにたのしくうちかたりて

もろともにうちくつろきてふくるまで

三とせのむかしかたるたのしさ

萩

露おきて咲ける小萩のゆかしきに

秋の夕風心してふけ

虫

月なくてをくらき夜半もなく虫の

こゑさやかなる蓬生の宿

親類なる家の老人身まかり

給ひぬときゝて

なかゝらぬ御いのちなりときゝなから

けふとはいかておもひかけきや

同じく

おこたらぬみいたつきとは知りつれと

いまはときけはかなしかりけり

折にふれて

たまゝに人とうまれて人をみの

さえさへもたぬおのか身そうき

あめにつけ風につけつゝふるさとの

たらちねのうへまつおもふかな

遠國なる友に

海山を遠くへたてゝ年ふれと

きみかまことをわすれやはする

師の君の御恩をおもひて

いつの世にむくいまつらんはてもなき

をしへのおやのふかきめくみは

高尾の紅葉見にももしけるをり

雨の降りいでければ

くれなゐの雲かと思ゆるもみち葉を

なほそめむとや村雨のふる

嵐

水底のにしきをそみる大なる川

きよきなかれにふねをうかへて

紅葉を見て

からにしきみるめもあやにおりいてし

たつた姫こそこゝろにくけれ

明治三十七年

紅梅

うくひすに雪と見えしと梅の花

紅ふかくさきいてにけむ

大神の心つくしそしのはるゝ

都の庭の紅梅のはな

雨中柳

さほひめのあらふ髪とも見ゆるかな

春雨そゝく青柳のいと

しみくと雨は降れとも柳原

かすむや春のしるしなるらむ

残雪

深からぬしるしなるらむ梓弓

春とはいへとのこる白雪

春かすみたなひく方に見えなから

なほ雪しろし比良の遠山

春雨

さく花のしつくと見しにまるやまや

かゝり火ゆらき春雨のふる

いつしかも小雨ふりきぬ宵の間は

おほろけなから月の見えしを

春月

世の人の心を花にゆつるとて

うちかすみても月のいつらむ

いかはかりのとかなるらむ大空の

かすみをわたる春の夜の月

燕

我がとの苗代水にかけ見えて

こそのはめのかへりきにけり

あたらしきことのみこのむ人の世に

古巢たつねてかへるつはめか

尋花

花かさしかへる人あり尋ねみむ

いつはりならし峯の白雲

おほろよの月かけふみてかへるかな

野山のさくら尋ねくらし

山吹

七重八重こかねの色にほへはや

實のなき花もてはやすらむ

くちなしの色としきけは山吹の

花は女のたからなりけり

池上藤

しつかなる春の池とやにほふらむ

なひくこすゑの藤波のかけ

池水にうつれる藤をむらさきの

波かもたつとおもひける哉

ほととぎす

まちわひて閨に入れともほととぎす

きゝはもらさぬよはの一こゑ

おほづかな人もきゝつやほととぎす

なのりいてたる今の一こゑ

競馬

玉ほこのすくなる道に世の人も

こゝろの駒のかけくらへせよ

赤よ勝て青よまされとみる人も

面白けなるこまくらへかな

蚊遣火

みしかよのほととぎすらしらるゝあしたまで

くゆりのこれる宵のかやり火

夏もなほ月のひかりやかすむらむ

蚊遣にくるゝ山本の里

夏月

蚊遣火のけむりもたえてふくるよの

空にすゝしくすめる月かな

霜とてり雪と光れる月見れば

空は夏ともおもほえぬかな

萩

萬代のかめにさゝむとおりたちて

折れはこほるゝ秋萩の花

秋萩の下葉のみかはうつらふは

人の心もひとしかりけり

朝顔

千とせへむ竹のまかきにさきながら

夕をまたぬ花もありけり

はかなきをおのかいのちとさためけむ

心やすけにさけるあさかほ

仲秋月

やさかにの御玉のかけと仰かなむ

雲井にてらす望のよの月

望月や今もその世のかけならは

わか世といひし昔かたらへ

名所紅葉

秋くれは小倉の山も紅葉して

まはゆきまてになりにけるかな

名にたかき高尾のにしきいかならむ

やとの梢は色つきにけり

初雪

初雪にうれしとかとにいて、見れは

寒さをなけく賤もありけり

めつらしき比良の高嶺の初雪に

秋のなこりを思ひすてつ、

國旗

天つ日にかゝやきあひていとしく

みいづもしるき大御旗かな

見るたびにたゝなにとなくうれしきは

軒に立てたる日の丸の旗

寄日祝

空にみつ日のみひかりやとこしへに

かゝやく國のみいつなるらむ

天の下仰かぬ國やなかるらむ

豊さかのほる朝日子のかけ

明治三十八年

小楠公の母

はゝそ葉のかけによりてそ櫻井に

のこる若木の花もにほへる

送 別

幸くあれと祝ひて送ることの葉の
下より露のなとこほるらむ

旅順開城

日のもととのしの初日にてらされて
さすかにとけしあつ氷かな

朝 鶯

鶯のきなく朝けのこゑきけは
はゝきとる手もおこたられけり

明治三十九年

夏 衣

世の人の心ともかな夏衣
うらなくてこそすゝしかりけれ

夏 川

すゝみにと人つとふなり冬の日は
知られさりつる里の小川に

夏 夕

はききよめ水うちそゝきはしるする
夕そ夏はたのしかりける

西の京にありし夏をおもひいてゝ

東路の夏の夕にしのおかな

加茂の川瀬にやとる月影

水清き清瀧川に袖ひてて

夏を忘れしこともありけり

夏 月

いろくつのおそへる池のさゝなみに

くたくる月の影の涼しさ

日のほとん汗あらはむとむすふ手の

清水にうつる月の影かな

里の子の螢追ふとて此處の水甘いぞ

あつちの水は辛いぞといふ聲をきいて

この水あましくと螢よふ

聲にきはしき里の夕くれ

海邊朝

品川や海原しろくあけそめて

臺場をてらす朝日子の影

雨の夜あたこ山にのほりし折のことを思ひいてて

あたこ山杉のしつくとふる雨と

まかへし事もしのはるゝ夜や

宮城を拜しける時猪熊先生のふたゝひ

國書進講の大命をかうふり給ひし事を

おもひ出て、

二重橋仰き見つゝも思ふ哉

かさねくゝの君かほまれを

池上にて

賤の夫の家路をいそく松原の

をちに見ゆるやふしの芝山

本門寺にて

杉むらの木立をもれてみたまやの

こかねににほふ夕つく日かな

ひるたにもをくらき森の木の間もる

夕日や法の光なるらむ

わか家に子らの數多來てあそへるに

泣くもあり笑ふもありて里の子の

つとへるやとの賑しきかな

いたく老い衰へてたよるへき方もなき翁

の我家を出てゆくうしろでを見送りて

よひかへし一夜宿さむものくれむ

賤の翁の影あはれなり

出て行きしあとに夕立のしければ

さらぬたに行きなやむ身にかゝるらむ

俄にそゝく夕立のあめ

東京に旅居する頃國元なる母にある筋より日
露戦役の際の効績顯著なりとて銀牌並に銅牌
を贈られたりと新聞紙上に見えたりければ

みほまれは世にうれしくてほいなきは

母の笑顔の見えぬなりけり

當時母の夜もいもねずいたつき給ふを

病もやいでなむといさめまゐらせし事

ともおもひいて、

みほまれのけふにあひてはなか／＼に

いさめし事のはつかしきかな

しろかねのしるしはやかてたらちねの

清くさやけき心なりけり

母より小包を送りこされし時

ひもときておもはず袖をぬらしけり

つゝみあまれる露のめくみに

小つゝみのつゝみの紙はうすけれと

あつきそ親のなさけなりける

森善七翁を悼む

時ならぬ老その森の夕しくれ

わかたもとにもかゝりけるかな

花の香を千代にとゝめて文の屋の

老木の梅は枯れにけるかな

翁の生前のことをおもひ出て、

弓のこと身はなりなから文の屋に

つくす心はたゆまさりけむ

翁の靈に

たまよ／＼うれしとも見よ文の屋は

榮えゆくなりいや年のほに

いにし年の筆始におのれ翁の手をとりて

萬歳とかゝせしことなとおもひいて、

萬歳と筆そめはて、うちまるひ

ゑみしすかたのしのはるゝかな

かりそめにかきなかしたる水莖の

あとはかたみとなりにけるかな

天満宮のほとりなる翁かり病をとふらひ

たるかへさ社の梅のさかりなるを見てよ

める

さりともと我はたのまむみやしろの

老木の梅の花によそへて

當時をしのひて

門の戸に顔さしのへて見送りし

その面影の目にのこりつゝ

翁か臨終の心を

吳竹の世をますくにもすくしきて

終の心ややすけかりけむ

翁の逝きしはわか學校の卒業式の

日なりければ

なれもまた花をかさして久方の

月の都にかへりけるかな

白といふことを

まほかたほ行きかふふねも面白き

あしたの海にかもめとふなり

ある夜

夜もすから閨の板戸にひゝくなり

うまやをもるゝいなゝきの聲

青木しむ子様を悼みて

坪井その尾

黒梓にみ名を見出でし驚きにいもねできみをかなしむ冬の夜
君を見し終りとなれる菊月の十日あまりの夕べをおもふ
別れかね夕べのいろの迫りくる紫苑がもとに語り合ひしか
いとし子も歎ける夫も悲しめる友もおきて逝ける君はや
かりそめの御言の葉もわすれえぬ實にも床しき君なりしか
君を泣き君をいたみて果しらず哀しき歌をうたひつゞくる
水莖のわきてめでたき君なりし今は悲しきみかたみとなる
君がため唱へまつるは壽量品提婆達多よりけさせ給へ

新子略歴

亡妻新子明治十七年一月四日下之關市入江町に生る關谷禎造同
歌子の女なり七歳同市王江尋常小學校に入り次て市立高等小學
校にすすみ業卒るや山口縣徳山なる赤松女學校に學び後京都府
立第一高等女學校に轉じ明治三十五年本科を卒業し更に進んで
國語漢文專攻科を修め續いて同校に教鞭を執る事約二年其間國
學を故猪熊夏樹翁に、和歌を池邊義象先生に師事し又仙宗左宗匠
の門に茶道を學ぶ明治四十一年余に嫁してより専ら家事に従ひ
心を子女の教養に傾け一家常に全きを得たり其人に交はるや赤

心を披瀝して毫も障壁を構へず徳風薫然、春の海の如く新舊知己の遠近より來り慕ふ人殆ど踵を接ぜり、嗚呼天道は是か非か、春風長へに吾家に吹くと思ひきや大正八年暮、避寒、越年及ひ一兒の病後保養等を兼ね僅かに十數日を鎌倉に過さむとて到りしに間もなく明るる正月の四日男壯太郎寒冒に襲はれ悪性とも知らずして看護中翌五日新子之に感染し續いて六日に長女園子、七日に三女繁子、九日に四女和子と疾風の如く傳はり同時に五人枕を列べ何れも肺炎を併發し四人の下婢亦輕症ながら交々病臥し僅かに事なきを得たるは唯余一人のみ其間乏しき看護婦を督勵して努力奮闘せしも壯太郎園子先づ危篤に瀕して力を新子に専らにす

る能はず新子身自ら褥中に在りて病兒を憂ひ心を醫藥看護の上に配り其苦痛の狀今尙ほ眼前に髣髴たり煩悶か天命か新子の病は大に進み先に危篤なりし兩兒の却て漸く危険の峠を降りつつある頃俄に急を告ぐるに至り大正九年一月十八日午前一時僅かに三十七歳を一期として此世を去れり當時病兒等何れも尙ほ重症なりし爲め母と相見るの一刹那すら許されず其喪を知らざること二十餘日、病漸く癒ゆるに及びて初めて告げらる、當時の事復た語るに忍びず（芝區白金町の瑞聖寺に葬り別に下關市東光寺の關谷墓地に分葬す）茲に亡妻の靈を慰むるか爲めに生前最も嗜みし和歌を集録して池邊先生の校閲を乞ひ追懷紀念として生前辱知の方々に贈る

大正十年三月

青木徹二識す

大正拾年參月拾五日印刷
大正拾年參月七日發行

遺詠奥付

編輯兼
發行者
青木徹二

東京市芝區白金台九十六番地

印刷者
吉川弘文館

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

代表者
林縫之助

11
611

終

